

中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開 ——薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺に注目して——

松 尾 剛 次

はじめに

奈良西大寺叡尊を中心とする叡尊教団は中世において日本全国に末寺を展開し、叡尊の時代には1500箇寺もの末寺があった¹。ここでは、南九州²の薩摩・日向・大隅3国における叡尊教団に注目するが、とくに薩摩国泰平寺、日向国宝満寺と大隅正国寺に光りを当てる。というのも、本文で述べるように3寺ともに、おのおの薩摩、日向、大隅3国における叡尊教団内で第1位の寺格を誇る末寺であったからだ。とりわけ、薩摩国泰平寺と日向国宝満寺は両寺ともに、室町幕府の利生塔設置寺院であった³ように、室町時代には薩摩・日向での一大拠点寺院だったからである。

第1章 薩摩 泰平寺

J R九州新幹線で、鹿児島中央駅から1駅目が川内（鹿児島県川内市）である。川内は薩摩国国府が置かれ、国分寺や一宮が所在したように薩摩国の中心であった。島津師久・伊久の頃には川内の碓山城を根拠として薩摩国守護所が所在した。

泰平寺は、現在の川内市泰平寺に所在する⁴。現地に立つと、真南に川内川が見え、川内川を押さえる寺であったと考えられる。かつては、太（泰力）平橋まで船がのぼったという⁵。

現在の泰平寺は、近世の阿弥陀如来をまつる本堂1つの寺院であるが、奈良時代には、元明天皇勅願の寺といわれる程、栄えていた。中世においては、室町幕府が66国2島に置いた利生塔が設定された寺で、室町幕府にとって、薩摩における極めて重要な寺院であった⁶。戦国時代においても、九州征伐に赴いた豊臣秀吉が陣所を置いたほどの設備を有していた。

明徳2（1391）年に書き改められた「西大寺末寺帳」には、以下のように薩摩国において唯一の直末寺（西大寺から直接住持が任命される寺）として記載されている⁷。

薩摩国
泰平寺

すなわち、薩摩国における叡尊教団の最大の拠点寺院であった。この寺の歴史については、『川内市史 上巻』⁸が詳しいが、問題が多い。それゆえ、『川内市史 上巻』を批判的に継承しつつ、私見を述べる。

泰平寺は、明治維新の廃仏棄釈によって無住となり、大正時代に復興して現在にいたっている。それゆえ、寺宝・古文書類も失われ、唯一、大黒天が残っているくらいである。しかし、幸いなことに、『三国名勝図会 第一巻』の「泰平寺」の項⁹には、当時、泰平寺に残っていた文書類などに基づいた詳しい記述がある。

『三国名勝図会』は、天保14（1843）年12月に編集されたもので、明治38（1905）年12月、島津家臨時編輯所の山本盛秀の名義で、もと全60巻という浩瀚なものを、20冊の和装本にまとめて出版された¹⁰。いわば、薩摩藩研究のバイブルとなっている。

そこで、まず、『三国名勝図会 第一巻』に基づいて、歴史を叙述してみたいが、『三国名勝図会』では、とても詳しく記述されているので要点をまとめると以下の様になる。

- (1) 泰平寺は、医王山正智院という元明天皇勅願寺で、和銅元（708）年の創建という。薬師如来を本尊とし、法相・天台・真言・律の4宗兼学の寺院であった。
- (2) 中世には、勅願寺に復し、足利直義によって、利生塔が設定され、所領が寄附された。宗派は律宗であった。
- (3) 利生塔は、9尺5寸もある五輪塔で、暦応3（1340）年2月に立てられ、境内の東側に、現存する。
- (4) その後、応永15（1408）年に教源によって復興がなされた。
- (5) 中世末になると衰退し堂舎も破壊されたが、享禄3（1530）年3月3日に死去した真言僧の宥海法印によって復興がなされ、以後、真言宗となった。宥海を中興開山とする。
- (6) 天正15（1587）年、宥印が住職の時には、九州征伐に来た豊臣秀吉が当寺を陣所とした。こうした『三国名勝図会 第一巻』の指摘を中世に関して再検討してみよう。

第1節 西大寺末寺としての泰平寺

西大寺末寺としての泰平寺に注目した場合に、まず、いつ西大寺末寺となったのかが注目される。それについては、西大寺関係者の物故者名簿といえる「西大寺光明真言過去帳」¹¹が参考になる。

光明真言会は叡尊が文永1（1264）年9月4日に西大寺建立の本願称徳女帝の忌日を期して開始した法会である。7昼夜にわたって亡者の追善、生者の現世利益のために光明真言を読誦する法会であり、諸国の末寺から僧衆が集り、西大寺内に宿泊して法会を勤修する叡尊教団の年中行事の中で最大のものであった。「光明真言過去帳」は、光明真言会にさいして1臈・2臈の役者が真読、すなわち、声を挙げないで全体を読むべき過去帳で、書き継がれてきた¹²。

この「光明真言過去帳」によれば、泰平寺関係者で、最初に出てくるのは、史料(1)のように行円房である¹³。

史料(1)

○當寺第六長老沙門澄心

道忍房 保延寺	如性房 永興寺
寂勝房 戒泉寺	寛宗房 西琳寺
舜律房 當寺住	本乗房 雲富寺
照觀房 金剛宝戒寺	浄生房 弘正寺
本智房 當寺住	○本光房 極楽寺長老
圓印房 鷲峯寺	本圓房 興法院
行圓房 泰平寺	鏡智房 西光寺
如道房 報恩寺	禪修房 長福寺

(中略)

○當寺第七長老沙門信昭

すなわち、貞和3(1347)年9月5日に死去した第6代西大寺長老澄心静心房と、文和元(1352)年3月2日に死去した第7代長老信昭静観房¹⁴の間に、「行円房 泰平寺」と記されている。その間に、行円は死去したのであろう。

ところで、この行円は、後述するごとく、まさに、暦応2(1339)年の利生塔設置時期には、泰平寺の長老、住持であった。とすれば、「光明真言過去帳」に、泰平寺関係者で最初に出てくる人物であった行円こそ、泰平律寺の開山であったのかも知れない。

この行円がどんな人であったのかについては、史料が少なくてははっきりしない。可能性のある人物として西大寺観尊の直弟子名簿である「授菩薩戒弟子交名」によれば「大和国人 祐実 行円房」¹⁵がいる。「授菩薩戒弟子交名」では、389人中で366番目に記されている。すなわち、おそらく、当時は若かったはずである。弘安3(1280)年時点で、20歳余とすれば、80歳まで生きていれば、泰平寺の行円房とは、大和出身の祐実ということになる。可能性を指摘しておこう。

行円房の他に、「光明真言過去帳」には、史料(2)のように、泰平寺明空房が、應永30(1423)年7月25日に死去した西大寺第24代長老元空と、永享2(1430)年8月2日に死去した西大寺第25代長老榮秀¹⁶との間に記載されている¹⁷。それ以後は、泰平寺関係者の名前はみられない。

史料(2)

○當寺第廿四長老沙門元空

興信房 律成寺	春鐘房 仙澗寺
覺恵房 長安寺	尊證房 常光寺

尊通房 當寺住	聖壽房 大乘寺
宗運房 法光明院	暁光房 大御輪寺
永賢房 大日寺	明空房 泰平寺
律國房 浄光寺	善心房 寶泉寺

(中略)

○當寺第廿五長老沙門榮秀

永享8(1436)年の「坊々寄宿末寺帳」には泰平寺は見えない¹⁸が、先述のように『三国名勝図会』によれば応永15(1408)年には教源による復興がなされたようなので、その頃には、西大寺末寺を離脱したのであろう。さらに、享禄3(1530)年3月3日に死去した真言僧の宥海法印によって復興がなされるにいたり、真言宗寺院となったのであろう¹⁹。

第2節 利生塔寺院泰平寺と五輪塔

泰平寺の歴史において、とくに利生塔が設定されたことは大いに注目される。泰平寺が、足利・北朝方にとって極めて重要な寺院であったのだらう²⁰。また、この利生塔が設定されたのは、泰平寺が律寺、とくに西大寺直末寺の時であった。

すなわち、『三国名勝図会 第一卷』には史料(3)~(7)の文書が引用されている²¹。

史料(3)

舍利奉納文曰

奉安置泰平寺塔婆

仏舍利二粒

右於六十六州之寺社建一国一基之塔婆，恭任申請，為勅願，仍奉請東寺仏舍利各奉納之

伏翼，皇祚悠久，衆心悦怡，仏法紹隆，利益平等，安置之儀，旨趣如件

⁽¹³³⁹⁾
曆応二年曆応二年八月十八日 左兵衛督源朝臣直義花押

史料(4)

院宣曰

薩摩国泰平寺塔婆事，為勅願之儀，遂修造之功，可奉祈天下泰平者，院宣如件，仍執達如件

⁽¹³³⁹⁾
曆応二年曆応二年十月十一日 按察使維願

行円上人御房

史料(5)

院宣曰

寺領興行事，任代々奉寄候，可有沙汰，甲乙人押領之所々以下，相尋在庁官人等，委可注進由，被仰下也，

史料(6)

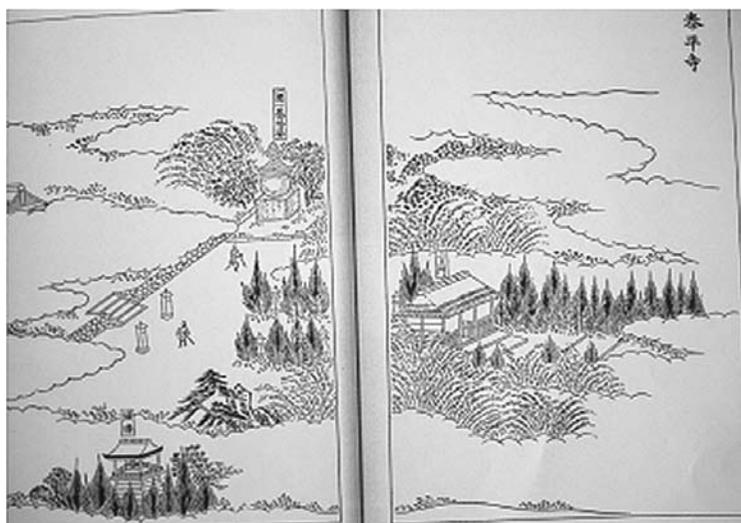
足利直義副書曰

薩摩国泰平寺塔婆事，院宣如件，為六十六基之随一，寄料所，可造立，可被存其旨之状如件，
曆応二年十月十四日 左兵衛督花押
泰平寺長老

史料(3)から史料(6)は，薩摩利生塔が泰平寺に立てられる経過を示している。まず，確認すべきは，通常，利生塔とは三重塔ないし五重塔と考えられている²²。たとえば若狭神宮寺に設定された利生塔の場合，「曆応三年正月一日，仏舍利二粒，一粒は東寺，当寺の三重塔婆に奉納す」のように，三重塔に仏舍利2粒が納められた²³。その中に東寺の舍利1粒と他の舍利1粒が納められていたのである。そうした利生塔が立てられた寺院には，所領が寄附された。

こうしたことを踏まえて史料を見ると，史料(4)から，薩摩利生塔の責任者は，先述した泰平寺行円であったことがわかる。また，先述のように，行円は泰平律寺の開山長老であった可能性がある。

ところで，泰平寺の利生塔については，従来，川内市史は，『三国名勝図会 第一巻』の説に従って，『三国名勝図会 第一巻』に描かれた巨大五輪塔（約2メートル85センチ）を利生塔に比定する。



図(1) 『三国名勝図会 第一巻』に描かれた泰平寺

それには、史料(7)のような銘文が記されていたという。

史料(7)

塔婆銘文曰

奉造立五輪塔一基

右志趣者、法界衆生殊一結講衆等菩提記也、仍所修如件、曆応三年二月時正、勸進、沙弥成道、大檀那善行

すなわち、史料(7)より、すべての衆生、とくに一結講衆の菩提のために暦応3（1340）年2月に、五輪塔が建てられたことがわかる。

たしかに、五輪塔造建の時期が暦応3（1340）年、利生塔の方が暦応2（1339）年であり、時期的に近接している。だが、通常利生塔の例から判断して、利生塔は三重塔ないし五重塔であったはずで、五輪塔とは異なる。

おそらく、五輪塔は、『三国名勝図会 第一卷』が書かれていたころにも存在し（図(1)）、史料(3)史料(6)にあった利生塔に、間違っ五輪塔が当てられたのであろう。

別稿で述べたように、中世の叡尊教団（西大寺とその末寺）では、2メートルを超える巨大五輪石塔が作られた。それらは、地輪の形の共通性から大きく3系統に分けられる²⁴。本五輪塔も叡尊教団のものであり、残っていれば、貴重な文化財であるのに、現存しないのは惜しまれる。

ところで、泰平寺は、川内川のほとりに立っていた。南門を少し行くと川内川にゆきあたる。そこは大門口という船着き場であったという。そこまで、船が来ていた。

そもそも、中世の律宗寺院は、橋や港の管理を任されていた。鎌倉極楽寺と和賀江津、博多大乗寺と博多港、橋寺放生院と宇治橋などがその例である²⁵。おそらく、川内川（それに掛かる橋）も泰平寺が管理していたのでろうと推測できる。

川内川は、川を境に隼人支配地との境界であったという。古代の泰平寺は、隼人支配の宗教的な拠点として建てられたのであろうか。中世においては、戦略上の拠点である川内川を押さえる泰平寺が重視されたのであろう。

第2章 日向志布志宝満寺

次に日向宝満寺（鹿児島県志布志市志布志町帖に所在した）に注目しよう。宝満寺についても優れた研究がなされてきた²⁶が、叡尊教団の展開の視点から再検討してみる。

第1節 西大寺末寺志布志宝満寺の再興と展開

宝満寺の歴史については、『三国名勝図会』²⁷、『志布志記』²⁸、『宝満寺文書』²⁹などを駆使した『志布志町誌 上巻』³⁰が詳しく、かつ、きわめて実証的である。それによれば、宝満寺は、秘山

密教院宝満寺といい、中世島津莊救仁院志布志における重要な寺院であった。

聖武天皇の神亀年間(724～729)に皇国鎮護のために勅願寺として創建されたという。その後、源頼朝が九州の諸侯伯に命じて本堂にその肖像を安置し、鎌倉から鶴岡八幡宮を勧請して鎮守としたという。正和5(1316)年には鎌倉極楽寺忍性の弟子信仙房英基によって復興され、以後、奈良西大寺末寺として栄えた。元応2(1320)年に本尊如意輪観音が奈良西大寺から下向し、本堂に安置された。観音の蓮台には、「元応二年庚申九月十九日造功畢、南都於西大寺開眼、願主光信左衛門尉入道長教」と記され、「光信は原田入道、左衛門尉入道は仲津川左衛門、長教は不明」という。暦応3(1340)年には、足利直義によって舍利が奉納され利生塔寺院に設定される程であった。以後も、西大寺末寺であったが、明治の廃仏毀釈によって廃寺となったという。ここでは、他の史料にあたって、再検討してみよう。

『大宰管内志』(下)には、「志布志記略」を引用して、「諸縣郡志布志密教院宝満寺者花園院之勅願所也、鎌倉極楽寺ノ開山忍性菩薩之弟子信仙上人英基和尚、正和五年開此寺、為開山、此寺律宗而南都ノ西大寺京都ノ泉涌寺両山ノ末寺也、寺領三十一石五斗六升」³¹とある。

すなわち、それによれば、宝満寺は正和5年に極楽寺忍性の弟子信仙房英基によって開山され、花園天皇の勅願所であった。叡尊教団は、衰退した旧寺を復興することが多いので、信仙坊英基によって再興されたのであろう。

この正和5年の信仙による宝満寺の再興に関しては、「宝満寺文書」により、具体的となる。すなわち、正和5年付けの安藤蓮聖による打渡状があり、得宗領であった志布志津と密接な関連を持つ寺として再興されたと考えられている³²。この点は、次章で述べる。

史料(8)³³

深聖房	浄土寺	○善願房	極楽寺長老
賢律房	當寺住	舜忍房	成願寺
信仙房	寶満寺	蔵性房	東光寺
願教房	安養寺	観宣房	當寺住
禪密房	西琳寺	圓法房	浄光寺
修真房	最福寺	實行房	尺迦寺
浄勇房	常光寺	○了心房	戒壇院長老

史料(8)は、前章で触れた「光明真言過去帳」の一部である。嘉暦元(1326)年8月10日に死去した極楽寺長老善願坊³⁴と、元徳元(1329)年10月3日に死去した戒壇院長老了心房³⁵との間に、宝満寺信仙房が記載されている。

それゆえ、正和5年に宝満寺の再興を開始した信仙房英基は、嘉暦元(1326)年8月10日から元徳元(1329)年10月3日までの間に亡くなったのであろう。

信仙房の活躍によって、宝満寺は西大寺の直末寺、すなわち、長老が西大寺から直接任命される寺院として発展していった。

往時には、宝満寺内の支院として光明院、吉祥院、妙特院、観音院、弥勒院、小塔院の6寺があり、志布志には九品寺という末寺もあったという³⁶。

明德2（1391）年に書き改められた「西大寺末寺帳」には

史料(9)³⁷

日向国

志布志

宝満寺

宝泉寺

とある。

すなわち、宝満寺は、明德2年には日向国における西大寺直末寺の筆頭であった。なお、第2位の宝泉寺がどこにあり、いかなる寺院であったのかなどは不明である³⁸。

史料(10)³⁹

東室三

天王寺

薬師院

摂州

吉祥寺

紀州

光明院

九州日向国

宝満寺

勢州

圓明寺

同神崎

極楽院

賀州

西光寺

また、史料(10)のように、永享8（1436）年3月日付けの「坊々寄宿末寺帳」によれば、西大寺光明真言会に際して、「東室三室」に泊まる末寺として宝満寺があがっている。それゆえ、永享8年までは、西大寺末寺として、奈良西大寺の光明真言会に参加していたのであろう。

史料(11)⁴⁰

(婆)

奉安置日向国宝満寺塔□

仏舎利二粒 一粒東寺

右、於六十六州之寺社、□□国一基之塔婆、忝任申請、既為勅願、仍奉請東寺仏舎利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、仏法紹隆、利益平等、□置之儀旨趣如件

曆応三年正月一日 左兵衛督源朝臣直義 (花押)

史料(11)によれば、曆応3 (1340) 年に足利直義により利生塔が設置された寺院であったことがわかる。なお、奉納された仏舎利は、現在、田中家に伝わるという⁴¹。



図(2) 田中家に伝わる仏舎利

史料(12)⁴²

日向国島津庄内宝満寺塔婆事、為六十六基□随一、寄料所可令興隆也、可被存其旨之状如件

曆応三年三月廿七日 左兵衛督源朝臣直義

当寺長老

史料(13)⁴³

日向国宝満□□□事、為勅願之□□修造之功、殊可□□天下泰平者、院宣如此、仍□□□□

曆応三年四月八日

舜律上人御□

史料(12)も史料(13)も、利生塔寺院設定に関わるものであり、いずれも宝満寺長老に宛てられたと考えられる。

それゆえ、史料(13)の舜律上人が、暦応3（1340）年時点での宝満寺長老であったと考えられる。おそらく、信仙房のあとを継いだ第2代長老であろう。

史料(14)⁴⁴

○當寺第六長老沙門澄心

道忍房 保延寺 如性房 永興寺

寂勝房 戒泉寺 寛宗房 西琳寺

舜律房 當寺住 本乗房 雲富寺

照観房 金剛宝戒寺 浄生房 弘正寺

本智房 當寺住 ○本光房 極楽寺長老

（中略）

當寺第七長老沙門信昭

この舜律上人に関しては、先の「西大寺光明真言過去帳」に、西大寺第6代長老澄心と同第7代長老信昭との間に挙がっている。

澄心は貞和3（1347）年9月5日に亡くなっている⁴⁵。信昭は文和元（1352）年3月2日に亡くなっている⁴⁶。それゆえ、舜律はその間に亡くなったと考えられる。舜律には、「当寺住」と注記があり、宝満寺ではなく、最後は西大寺で亡くなったと考えられる。だが、暦応3年頃は宝満寺長老であったのだろう。宝満寺長老は、西大寺によって任命されており、本寺にもどることもあったのであろう。

第2節 宝満寺を支えた人々

第1項 光信五輪塔

ところで、宝満寺の裏山の住職墓地には、数多くの五輪塔がある。とくに、小ぶりだが花崗岩製の光信五輪塔は注目される。

この光信五輪塔は、佐藤氏によって発見されたものである⁴⁷。すなわち、本五輪塔の地輪の部分には、「元徳二年 キリーク 沙弥光信」とあることから、光信によって元徳2（1330）年に立てられたと考えられている⁴⁸。また、先述した元応2（1320）年に本堂に安置された本尊如意輪観音の蓮台部には、「元応二年庚申九月十九日造功畢、南都於西大寺開眼、願主光信左衛門尉入道長教」と記されていた⁴⁹が、その光信を五輪塔の光信と同一人とされる。

同一人物とする指摘は説得力があるが、光信を信仙の後を継いだ第2代長老と推測される点は支持できない。というのも、光信は半人前の沙弥に過ぎず、長老は比丘でなければならない。ところが、先述のように、信仙房は1326～29年の間に死去しており、元徳2年には、光信は長老でなければならないが、その当ても沙弥であった。しかも、先述のように舜律房が第2代



図(3) 光信五輪塔

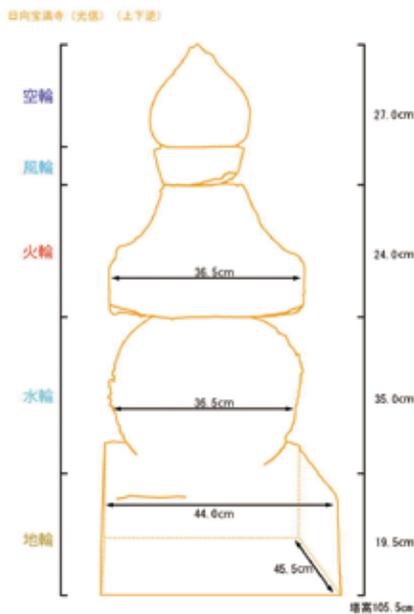
佐藤聖氏は、様式が西大寺様式の五輪塔であるとされ、関西からもたらされたと推測されている。

長老と考えられる。それゆえ、沙弥光信は、宝満寺信者の在家沙弥であったと推測したい。

ところで、「志布志記」⁵⁰「三国名勝図会」⁵¹ いずれも、光信を原田入道とする。残念ながら、その根拠が示されていないが、観音の蓮台に記された願主三人について、「光信は原田入道、左衛門尉入道は仲津川左衛門、長教は不明」とし、「長教は不明」と指摘するように、その記述は実証的である。

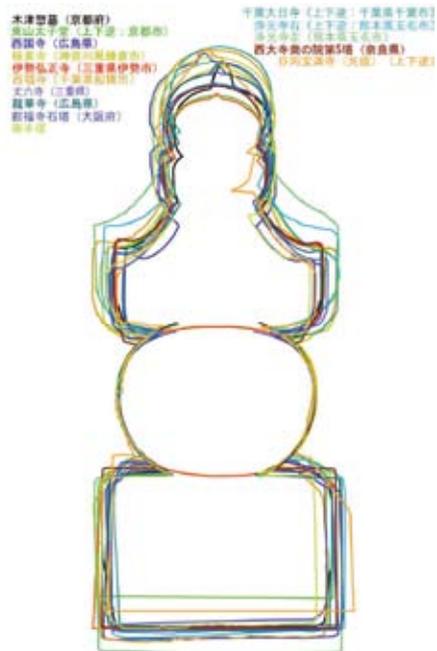
宝満寺には、現在は失われた古文書がかつては数多く残っていたようなので、光信を原田入道とする文書があったのかもしれない。

さて、光信の五輪塔は、以下のような、寸法の五輪塔である。地輪幅 44cm、奥行 45.5cm、高さ 19.5cm 水輪幅 36.5cm、高さ 35cm、火輪幅 36.5cm、高さ 24cm。但し風輪と空輪は合わせて高さ 27cmだが、別石である。



2011/07/06

図(4) 光信五輪塔線画



2011/07/06 本津惣墓系五輪塔

図(5) 本津惣墓系五輪塔

先述したように、水輪の形に注目すると、西大寺様式の五輪塔は3系統に分類できるが、光信五輪塔は、水輪の上下をコンピューター上で逆にすると、図(5)のように木津惣墓系統に分類できる。その点からも、西大寺様式であると考えられる。

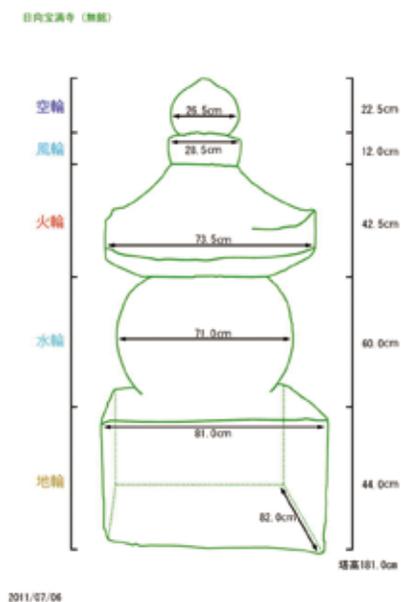


住職墓地には光信五輪塔以外にも、五輪塔が数多くあるが、いまだ調査されていない。そこで、現存する五輪塔で最大の6尺塔を調査した。大きさなどは、以下の通りである。地輪幅81cm、奥行き82cm、高さ44cm、水輪幅71cm 高さ60cm、火輪幅73.5cm、高さ42.5cm、風輪幅28.5cm、高さ12cm、空輪幅26.5cm、高さ22.5cm。

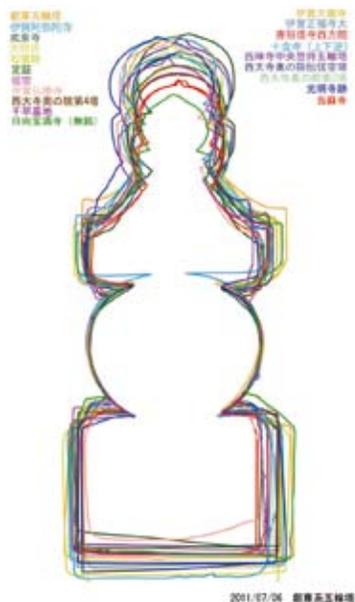
凝灰岩製であるが、非常に形が整っている。無銘であるが、住職のものであろう。

この五輪塔も、水輪に注目する西大寺様式の3系統と比較すると、図のように叡尊系五輪塔と一致する。

図(6) 住職墓6尺塔



図(7) 住職墓6尺塔線画



図(8) 叡尊系五輪塔

第2項 安東蓮聖・志布志津・宝満寺

前章において、志布志宝満寺が、勅願寺で、室町時代には利生塔設定寺院であるほど栄えていたことがわかる。

そうした宝満寺の繁栄を支えたものは、島津荘の外港であった志布志津⁵²の管理権であっ

たと推測される。そこで、ここでは従来さほど注目されていない、志布志津との関わりについてみてみよう。

史料(15)⁵³

奉打渡

日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地四至境事

限東深小路大道

限南経峰

限西河

限北天神山後堀

右、任被仰下之旨、奉打渡于宝満寺之状如件、

正和五年十一月三被 沙弥蓮正 在判

史料(15)は、蓮正打渡状である。この蓮正については、得宗被官安東蓮聖とする見解が有力である⁵⁴。正和5（1316）年は、信仙房による宝満寺再興が始まった年で、救仁院内の志布志は得宗領であった。安東蓮聖は、90歳まで長生きをしたが、当時、70歳であり、引退していた可能性もあるが、ひとまず、打渡状の発給者が得宗被官安東蓮聖であった可能性はある。

また、志布志津は日向本荘島津院（都城市）の外港であった。すなわち、重要な港で、種子島とも結ぶ南方貿易の港であった。

さらに、信仙房は、極楽寺忍性の弟子であり、得宗や安東蓮聖と面識があった可能性も高い。とすれば、この志布志宝満寺と志布志津修築の際も久米田寺再興と福泊り修築などで、叡尊教団を支援した得宗と安東蓮聖⁵⁵が協力した可能性は高い。

『志布志町誌 上巻』には、昭和30年代の聞き取りをもとに、作成された明治元年頃の志布志の絵図が付録として付けられている⁵⁶。それによれば、宝満寺が前川（志布志川）に面し、中世の海岸線を考えると、まさに志布志津に面していたことがわかる。

この配置は、種子島慈恩寺にもあてはまるが、慈恩寺が赤尾木津（西ノ表港）を管理した⁵⁷ように、宝満寺は志布志津の管理を担当していた可能性は高い。

なお、『種子島家年中行事』によれば、種子島時充（?～1396）の妻は、日向志布志の野辺盛忠の息女という。すなわち、「御譜云、六代左近将監時充公室ハ、日州志布志の野辺肥後守盛忠息女也」⁵⁸とある。種子島と志布志とは、人的にも密接に結びついていた点も忘れてはならない。

第3章 大隅国正国寺

梅霊山無量寿院正国寺は、現在、廃寺であるが、大隅正八幡宮（現在の鹿児島神宮）の神宮寺3箇寺⁵⁹の1つで、かつては霧島市隼人町字内山田の宇都山集落内に所在⁶⁰した。西大寺

末寺の律寺であった。もともとは現在の隼人塚（鹿児島県霧島市隼人町）の地に所在した。というのも、隼人塚の石仏とよく似た、康治元（1142）年の銘を持つ石仏が宇都山の正国寺跡から発掘されたからである。この石仏の存在により、正国寺は康治元年頃には所在した寺院であったことが明らかとなった。

この正国寺については、霧島市教育委員会や八尋和泉氏の研究⁶¹がある。教育委員会の報告書は、文化財を中心に正国寺の歴史を明らかにしている。他方、八尋氏は、律宗寺院の美術史の観点から研究されており、隼人塚にのこる四天王像が、「体形の内どりや大きな兜の誇張された彫出、甲冑と衣文の織りなす襞の処理」などから、その制作年代を鎌倉時代末、南北朝時代の初めの律寺として最盛期のものとされる⁶²。しかし、正国寺の歴史については『三国名勝図会』の記述を引用するに止まっている。そこで、もう少し検討してみよう。

第1節 律寺としての正国寺

『三国名勝図会』によれば、(1)正国寺は西大寺末寺の律寺であり、(2)慈道の弟子円秀を開山として、(3)元徳2（1330）年に創建されたこと、などが記されている⁶³。

まず、西大寺末寺であった点についてみてみよう。明徳2（1391）年に書き改められたという「西大寺末寺帳」には以下のように記載されている。

史料(16)

大隅国	
正国寺	慈音寺

すなわち、正国寺と慈恩寺⁶⁴の2箇寺が挙がっている。明徳「西大寺末寺帳」は、先にも触れたが、奈良西大寺の直末寺を書き上げたもので、それらの寺院は、ようするに、西大寺から直接に住持（長老という）が任命された。また、正国寺が大隅国の直末寺の筆頭に記載されていることから、大隅国の西大寺末寺の筆頭寺院であったと考えられる。

また、永享8（1438）年の「坊々寄宿末寺帳」にも、「四室分」に「大隅国宮内正国寺」として挙がっている。光明真言会に際して、「四室」に泊まることになっていたと考えられる。

さらに、正国寺は江戸時代（元和元年以後）の「西大寺末寺帳」にも記載されており、江戸時代においても西大寺末寺であったと考えられる。

ところで、いつから律寺となったのであろうか。『三国名勝図会』によれば、龜山院によって、蒙古襲来に際して、一宮・国分寺の興行が西大寺叡尊に命じられ、1国に1寺建てられたが、正国寺は大隅国分であったという。その伝承が正しければ、正国寺は、大隅国の一宮大隅八幡宮の神宮寺であり、蒙古襲来にともなう一宮・国分寺興隆にともなって建立（中興）されたということになる。それゆえ、鎌倉末期に中興されたことになる。実際に、弘安7（1284）年には鎌倉幕府は国分寺・一宮の興行を宣言し、それを実際には西大寺・極楽寺が担っていた⁶⁵。

それゆえ、正国寺の中興は、蒙古襲来に際しての一宮・国分寺の興行、ここでは大隅一宮正八幡宮興行のために、西大寺に命じて行われたのであろう。

第2節 開山円秀とその後の住持

さて、『三国名勝図会』によれば、正国寺は西大寺第2代長老慈道房信空の弟子円秀によって開山されたという。この円秀がいかなる人物がはっきりしない。

史料⁽¹⁷⁾⁶⁶

為三宝久住利楽諸衆生奉造立、離愛金剛之尊像爲奉納御身、令賢比丘書漢字令嚴貞比丘、寫梵字自書之令、寂忍近事造經臺以奉納此經、矣即自八月十八日初夜至于同廿五日、黄昏七ヶ日夜之間令衆僧誦彼、神呪睿尊嚴貞共修六時行法各三時

日本国入王八十九代宝治元年 歲次丁未 八月十八日記之

仏師善円
經師実有
大檀越範恩近事
大願主叡尊比丘

衆僧

比丘嚴貞、比丘善嚴、比丘幸円、比丘聖尊、比丘忍性、比丘寂尊、比丘親如、比丘叡実、比丘賢任、比丘頼玄、比丘源真、比丘覚順、比丘永真、比丘重円、比丘幸真
沙弥信空、形同沙弥妙尊、形同沙弥円秀、形同沙弥惣持

史料⁽¹⁷⁾のように、宝治元(1247)年8月18日付「金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經奥書」に忍性や「沙弥信空」らとともに、「形同沙弥円秀」なる人物が見える。形同沙弥は、沙弥の前段階の存在であり⁶⁷、この人物が、若き日の円秀なのかもしれない。

円秀以後の住持はだれであったのだろうか。先の「光明真言過去帳」によれば、西大寺第15代長老興泉と第16代長老禅譽の間に「了浄房 正國寺」が記されている⁶⁸。第15代長老の興泉信葉は康暦元(1379)年6月1日に86歳で死去した。また、第16代禅譽圓宗は嘉慶2(1388)年5月5日に90歳で死去している⁶⁹。それゆえ、康暦元年6月1日から嘉慶2年5月5日の間に死去したのであろう。この了浄房以外にも、「乗源房 正國寺」、「良瑜房 正國寺」などが挙げられている。

第3節 元徳2年の創建とは

『三国名勝図会』が伝える寺伝(由緒書)によれば、元徳2(1330)年の創建という。しかし、

元徳2年は亀山院の時代ではないことなどから、『三国名勝図会』の編者は、それを否定し、『鹿児島県の地名』も同様である。

先述した康治元（1142）年の石仏の存在から、平安末期には正国寺は存在していた。それゆえ、元徳2年は、中興の年である。

ここでは、寺伝を尊重したい。というのも、『三国名勝図会』には、「暦応五年、六月、時の住僧、当寺修營の事を奉行所に訴へし文に、来由を書して、元徳年中草創なりと記しぬ」⁷⁰とあり、暦応5（1342）年の段階で、寺僧は元徳年中の草創と認識していたことになり、ひとまずそれを尊重すべきであろう。亀山院の時に創建（中興）計画が立てられたとしても実行に移るまでにタイムラグがありうるからである。すなわち、実際に中興が行われたのが元徳2年と考えたい。おそらく、その際に、隼人塚の地から、宇都山の地に移ったのであろう⁷¹。

最後に、大隅国利生塔との関係に注目したい。前章までで論じてきたように、薩摩泰平寺も日向宝満寺もいずれも、薩摩・日向の利生塔があった。とすれば、西大寺末寺内で同様な寺格であった大隅正国寺も利生塔寺院であった可能性を指摘しておきたい。

また、他の薩摩泰平寺も日向宝満寺も、川や津の管理を担当していたと考えられる。大隅正国寺については、史料がないが、正八幡宮から隼人塚を通って濱に出る道があり、その濱を管理していたかもしれない。

おわりに

以上、薩摩泰平寺、日向宝満寺、大隅正国寺に注目して、叡尊教団による薩摩・日向・大隅3国への展開をみた。叡尊教団の活動によって、泰平寺、宝満寺が室町幕府の地域拠点寺院たる利生塔設置寺院となるほど大発展を遂げていたことは大いに注目される。

また、2メートルを超える巨大五輪塔が江戸時代までは泰平寺に所在するなど、叡尊教団による巨大五輪塔造立の事実が確かめられた。

さらに、律寺が河川・港湾管理を担うという原則が、その3寺にもほぼ当てはまることがわかった。

本文で述べたように、泰平寺は、川内川のほとりに立ち、川内川を管理していたようである。そもそも、中世の律宗寺院は、橋や港の管理を任されていた。おそらく、川内川（それに掛かる橋）も泰平寺が管理していたのでろうと推測している。川内川は、川を境に隼人支配地との境界であったという。古代の泰平寺は、隼人支配の宗教的な拠点として建てられたのであろうか。中世においては、戦略上の拠点である川内川を押さえる泰平寺が重視されたのであろう。

他方、正和5（1316）年の信仙による宝満寺の再興は、得宗被官安東蓮聖も協力したものであり、それは、島津荘の外港で南方貿易の港でもあった志布志津の管理者としての宝満寺に注目したものであったと考えられる。志布志宝満寺のケースも西大寺末寺興隆と港整備に得宗被官安東蓮聖が協力した事例であったといえる。

正国寺については、史料がないが、八幡宮の放生会の濱殿下り神事で向かう隼人港を管理していたのかもしれない。今後の課題である。

註

- 1 拙著『勸進と破戒の中世史』（吉川弘文館，初版1995，本稿では改訂版である2002年刊行の第2版を使う）131頁。
- 2 近年の南九州地域史の重要な研究として、柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』（吉川弘文館，2011）がある。
- 3 拙著『日本中世の禪と律』（吉川弘文館，2006）198頁。
- 4 2009年3月7日，泰平寺を訪ねた。突然の来訪にも関わらず，話をしてくださった泰平寺住職羽坂光昭氏に感謝の意を表します。
- 5 御住職のご教示による。
- 6 拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉198頁。
- 7 拙稿「西大寺末寺帳考」『勸進と破戒の中世史』（吉川弘文館，1995）152頁。
- 8 川内市史編纂委員会『川内市史 上巻』（鹿児島県川内市，1985，以下『川内市史 上巻』という）481・482頁参照。
- 9 原口虎雄監修『三国名勝図会 第1巻』（新潮社，1982）928～938頁。
- 10 原口虎雄監修『三国名勝図会 索引』（新潮社，1982）の「解題」3頁。
- 11 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」（速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館，2006）91頁。
- 12 元興寺文化財研究所編『西大寺光明真言会の調査報告書』（元興寺文化財研究所，1982）15頁，拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉参照。
- 13 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉91頁。
- 14 「西大寺代々長老名」（『西大寺関係史料（一）』奈良国立文化財研究所，1968）73頁。
- 15 「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒弟子交名」と「近住男女交名」（拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉78頁。
- 16 「西大寺代々長老名」〈前註（14）〉73頁。
- 17 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉105頁。
- 18 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉の「西大寺末寺帳考」154～161頁参照。
- 19 『三国名勝図会 第1巻』〈前註（9）〉930頁。
- 20 利生塔の概説については，拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉第4章「安国寺利生塔再考」参照。
- 21 『三国名勝図会 第1巻』〈前註（9）〉933～935頁。
- 22 拙著『日本中世の禪と律』〈前註（3）〉186頁参照。

- 23 『福井県史資料編9』所収「神宮寺文書」10号文書。
- 24 拙著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館，2010）83頁参照。
- 25 極楽寺と和賀江については拙著『忍性』（ミネルヴァ書房，2002）参照。博多と大乘寺については，拙稿「博多大乗寺と中世都市博多」『鎌倉遺文研究』17号，2006（拙著『中世律宗と死の文化』〈前註（24）〉所収）参照。橋寺放生院と宇治橋との関係については，拙稿「叡尊教団と中世都市平安京」『戒律文化』7号，2008（拙著『中世律宗と死の文化』〈前註（24）〉所収）参照。
- 26 『志布志町誌 上巻』（志布志町役場，1972），八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」（『仏教芸術 特集 叡尊と西大寺派美術』199，1991）。『宮崎県史通史編中世』（宮崎県，1999，402～405頁），佐藤亜聖「鹿児島県志布志町宝満寺所在元徳二年銘五輪塔について」『元興寺文化財研究』（元興寺文化財研究所，2004）。また，平成13・14年度には境内地の発掘も行なわれた（『志布志町埋蔵文化財発掘報告書（31）』鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会，2003）。それによると，洪水のため遺跡が削られるなど遺構の痕跡はなくなっていた。しかし，少数ながら貿易陶磁器を含めた中・近世の陶磁器片が出たことは注目される。
- 27 『三国名勝図会 第4巻』（青潮社，1982）1032～1045頁。
- 28 『志布志記』（志布志町教育委員会，2000）に翻刻。『志布志記』は1783年に作成された（『志布志記』4頁）。
- 29 「宝満寺文書」は『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』（鹿児島県，1979）448，595・596，728・729頁に所収。
- 30 『志布志町誌 上巻』〈前註（26）〉415頁。
- 31 伊藤常足『太宰管内志（下）』（歴史図書社，1969）108頁。
- 32 『宮崎県史 通史編中世』〈前註（26）〉405頁。
- 33 拙稿「西大寺光明真言過去帳の分析」〈前註（11）〉87頁。
- 34 「常楽記」（『群書類従』29）212頁による。
- 35 「招提千歳伝記」（『大日本仏教全書』所収）55頁による。
- 36 原口虎雄監修『三国名勝図会 第4巻』〈前註（27）〉1044頁。また，大隅國曾於郡にも持宝院という末寺があった（原口虎雄監修『三国名勝図会 第3巻』（青潮社，1982）418頁。
- 37 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉。
- 38 『角川 日本地名体系 宮崎県』によれば，宮崎市に浄土真宗の「宝泉寺」があり，真言系の寺院が真宗化したという。この寺院が宝泉寺だったのかもしれない。
- 39 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉158頁。
- 40 瀬野精一郎編『南北朝遺文 九州編二』（東京堂出版，1981）1464号文書。
- 41 志布志市役所志布志支所で写真を撮影した。
- 42 「宝満寺文書」『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』〈前註（29）〉729頁

- 43 同前。
- 44 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註 (11)〉頁。
- 45 「西大寺代々長老名」〈前註 (14)〉73 頁。
- 46 同前。
- 47 佐藤「鹿児島県志布志町宝満寺所在元徳二年銘五輪塔について」〈前註 (26)〉。
- 48 光信の供養のために立てられた可能性もある。
- 49 山岸公基氏は平成 20 年に、もと宝満寺にあったという如意輪観音像を調査されたが、そうした銘はなかったという。しかも、その像は江戸時代のものという。ただし、江戸時代の「志布志記」に銘文の存在が見えるし、光信五輪塔の発見によって、如意輪観音像銘文の光信の実在は実証されたことになる。たぶん、現在の如意輪観音像は本尊の如意輪観音像とは別物なのであろう。
- 50 『志布志記』〈前註 (28)〉65 頁。
- 51 『三国名勝図会 第4巻』〈前註 (27)〉1034 頁。
- 52 『宮崎県史 通史編中世』〈前註 (26)〉89 頁。
- 53 「宝満寺文書」『鹿児島県史料 旧記雑録前編1』〈前註 (29)〉。
- 54 『宮崎県史通史編中世』〈前註 (26)〉405 頁。
- 55 戸田芳実『中世の神仏と道』(吉川弘文館, 2010) 所収「播磨国福泊と安東蓮聖」参照。
- 56 『志布志町誌 上巻』〈前註 (26)〉巻末付図。志布志市教育委員会の米元史郎氏のご教示による。
- 57 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註 (24)〉254・255 頁参照。
- 58 『種子島家年中行事』(熊毛文学会, 1964) 135 頁。
- 59 正高寺, 正興寺, 正国寺の3つである。
- 60 藤浪三千尋氏のご教示による。藤浪氏によれば霧島市立隼人塚史跡館所蔵の正国寺の石仏は字内山田の宇都山集落から出たという。
- 61 八尋和泉「九州西大寺末寺とその遺産」〈前註 (26)〉。また、『鹿児島神宮史』(鹿児島神宮, 1989), 『隼人町の石造遺物』(隼人町, 1995), 『鹿児島県の地名』(平凡社, 1998) 624 頁, 『海と城館が支えた祈りの世界-大隅正八幡宮と宮内の1000年』(霧島市立隼人歴史民俗資料館, 2010), 『霧島市文化財調査報告書 大隅正八幡宮関連遺跡群 -総合調査報告書-』(霧島市教育委員会, 2011) も参考になる。正国寺については、『霧島市文化財調査報告書』が現在の研究の到達点といえる。
- 62 藤浪氏は、四天王像を12世紀のものとする(「隼人塚石塔と四天王像との関係の研究」『南九州の石塔』14号, 2004)。
- 63 『三国名勝図会 第3巻』〈前註 (36)〉70 頁。
- 64 大隅慈音寺については拙著『中世律宗と死の文化』〈前註 (24)〉247～261 頁参照。慈音

寺は種子島（15世紀後半までは、種子島、屋久島、口恵良部島三島全体の寺院が律宗であった）を代表する律寺であった。

- 65 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註（1）〉27頁。
- 66 『西大寺叡尊伝記集成』（法蔵館，1977）328頁。
- 67 蓑輪顕量「戒律復興運動」（松尾剛次編『叡尊・忍性』吉川弘文館，2004）64・65頁。
- 68 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前註（11）〉98頁。
- 69 「西大寺代と長老名」〈前註（14）〉73頁。
- 70 『三国名勝図会 第3巻』〈前註（36）〉71頁。
- 71 『霧島市文化財調査報告書』（藤浪氏執筆部分）〈前註（61）〉も、元徳2年に隼人塚から移転したと推測している。

The Development of the Eizon Order in Satsuma Province, Hyūga Province, and Ōsumi Province focusing on Taihei Temple, Hōman Temple and Shōkoku Temple in the Middle Ages

Kenji MATSUO

This paper aims to clarify how the Ritsu sect prevailed in southern Japan, focusing on Taihei Temple in Satsuma province, Hōman Temple in Hyūga province, and Shōkoku Temple in Ōsumi province. In the Middle Ages, though no longer, all belonged to the Ritsu sect and were branch temples of Saidai Temple in Nara. At that time, Satsuma, Hyūga and Ōsumi provinces, which make up modern Kagoshima prefecture, were ruled by Shimazu clans.

The restoration of Taihei Temple began in the late 13th century by Gyōen, a disciple of Eizon, founder of the Ritsu sect. Gyōen succeeded in its reconstruction and it then became one of the Muromachi shogunate's Rishōtō temples. One temple in every province was designated as a Rishōtō temple by the Muromachi shogunate. Eiki, who belonged to the Ritsu sect, restored Hōman Temple in 1316 with the cooperation of Renshō Andō. It also became a Rishōtō temple. Shōkoku Temple was re-established in 1330 by Enshū and later became a branch temple of Saidai Temple, to which Enshū was affiliated.

As just illustrated, these three temples were restored by Ritsu monks, after which they became branch temples of Saidai Temple. It is noteworthy that two of them were also Muromachi shogunate's Rishōtō temples. In this way, the Ritsu sect expanded in Satsuma, Hyūga and Ōsumi provinces.

